

# アジアの農村における“開発” の導入と農民の対応—地域発展 の固有論理を求めて

## 1. 研究組織

- 研究代表者：足立 明（北海道大学文学部・助教授）  
研究分担者：福井 清一（九州大学農学部・助教授）  
野間 晴雄（奈良女子大学文学部・助教授）  
富山 一郎（神戸市外国語大学・外国語学部・助教授）  
宇佐見晃一（京都大学農学部・講師）

## 2. 研究のねらい・目的

平成6年度の研究は、前年度の研究の延長上にある。そのため、前年度のくり返しになるが、この研究のねらいと目的を述べてみたい。

これまでの“開発”に関わる研究は、“開発”という概念を、大なり小なり客観的に規定され、実証的に把握できるものとして用いてきた。事実、本申請者と研究分担者も、そのような立場でアジアの農村研究を実施してきたのである。しかし我々はこれまでの調査経験の中で、“開発”をそのような実体概念としてのみ捉えることに不満を感じてきた。つまり、これまで我々が蓄積してきた“開発”過程の経験的・実体的分析に加えて、“開発”というものを西欧社会をモデルとして歴史的に（権力・知のアンサンブルの中で）構成された強力な言説の束（または世界の見方）として捉え、それが農村部へ浸透し、農民を“開発”実践する主体となす過程として分析する必要性を感じてきたのである。

そこで本研究は、上記のような複合的視点からアジア農村の分析を行い、より立体的な視点で農村の発展・変容過程の記述を試みようとした。具体的には、本申請者と研究分担者がこれまで研究してきた南アジア（スリランカ、バングラデシュ）、東南アジア（タイ、フィリピン）、東アジア（日本）の農村を対象に、(1)それらの農村に対する外部からの“開発”概念の導入・定着の過程（“開発”の実定化過程）を分析し、その際、西欧的な“開発”の言説が、当該社会の固有な条件（宗教的世界観、教育における進歩観、ナショナリズム、社会階層、政治経済状況など）の下で、どのように具体的な“開発”や“発展”のイメージとして生みだされてくるのかを問おうとした。さらに、(2)そのような“開発”概念の導入に対する農民の様々な（積極的・消極的・否定的）対応を、“開発”に関する語り（開発儀礼、開発キャンペーン）や具

体的な実践（共同労働、土地改革、農協組織、出稼ぎなど）において分析しようとした。そして、(3)これまで我々が蓄積してきた実体的・経験的な“開発”過程の資料と突き合わせ、より立体的な農村変容の分析・記述を目指したのである。そして、これらの作業を通じて、アジアの農村における村落レベルでの「発展の固有論理」を模索することができる考えたのである。

### 3. 平成6年度の研究経過

上でも述べたように、本研究の目的は、アジアの農村での開発導入過程を総合的に分析するための枠組の模索であった。特に、開発というものを西欧社会をモデルとして構成されてきた言説として捉える視角（以下、視角A）と、そのようにして構成された開発概念を何らかの形で前提とした上で、実体的な開発導入過程を分析するという視角（以下、視角B）の統合を模索してきた。そのため、この1年間で4回の研究会を行ない、班員の発表に加え、各分野からゲストを招き、広い知見を得た。研究会の実施経過は以下の通りである。

#### 第1回研究会『農村開発の経験：バングラデシュと日本』

（長崎市にて、平成6年7月7日）

Maha Alam(バングラデシュ政府)「Local administration, cooperation, village society and rural development: Bangladesh experience」

能美 誠(鳥取大)「Rural development and economic development in Japan」

研究会後、外海町の村おこし事業見学

#### 第2回研究会『原班、中村班、足立班合同研究会』

（福岡市にて、平成6年10月8日～9日）

海田能宏(京大)「発展の固有型はあるか：アジア6デルタの比較を通して」

井上 真(東大)「インドネシアの経済発展と森林利用」

河村能夫(龍大)「貧困概念とその指標について」

廣岡博之(龍大)「社会経済指標の再検討」

福井清一(九大)「緑の革命・農地改革・所得配分：フィリピンの2大農村  
開発事業が残したもの」

#### 第3回研究会『「開発」とオリエンタリズム—発展の固有性を求めて』

（京都市にて、平成6年11月23日）

富山一郎(神外大)「オリエンタリズムの現在」

崎山政毅（京大）「発展の固有性とオリエンタリズム」

小熊英二（東大院）「植民学と開発」

渡辺公三（立命大）「開発について私の知っている二、三の事柄」

太田好信（九大）「文化相対主義をめぐる」

#### 第4回研究会『開発現象への視角』

（京都市にて、平成7年2月4日）

足立 明（北大）「開発現象への視角」

その後総合討論

次に、これらの研究会での発表内容と論点を、視角Aと視角Bに分けて簡単に示してみたい。もっとも、個々の研究発表は必然的に両方の視角を含んでおり、明確に分けることは困難だが、便宜上どちらかに分けて述べてみる。

まず視角Aに関してである。戦後の開発は、その前史である植民地時代と不可分な関係にある。そこで、その関係を考察するために、新渡戸稲造と矢内原忠雄の植民思想が検討された（小熊）。また、戦後の開発は、植民地の枠組みからの「脱却」を前提としており、発展という「普遍的」な語りと、国民国家形成のための「ナショナル」な語り（「地域の固有性」）とが錯綜し、特異なループを形成するという。ニカラグアの経験から、このループが示された（崎山）。さらに、このような特異なループにみられる「普遍」としての発展と地域の固有性としての「文化」という対立を回避するために、文化相対主義が検討され、新たな文化論としての異種混交論が提示された（太田）。これらの議論に加えて、第三世界の開発と（西欧）市民社会との関係が概念的、実体的に検討され、開発と市民社会という論点が明らかにされた（渡辺）。

また、以上のような、開発・発展にたいして距離をとって論ずる立場ではなく、開発・発展に積極的に関与する立場からも議論がなされた。それは、貧困・開発・発展を評価し、未来の計画を立てるための指標の模索であり、様々な視点からそれらが検討された（廣岡、河村）。

このような視角Aにたいして、視角Bからの議論も行われた。まず、大きな時空間の比較として、アジアの6つのデルタにおける発展の過程が検討され、それぞれの特徴が描き出された（海田）。また国民国家単位での発展が検討され、日本の村落開発と経済発展（能美）、インドネシアの森林利用（井上）、バングラデシュ農村における地方行政と村の関係（Alam）が、論じられた。さらに、フィリピンでの二大農村開発事業である「緑の革命」と「農地改革」が検討され、それらが過去20年間に農村におよぼした影響を、所得水準・所得分配の変化から論じられた（福井）。

このように、視角Aと視角Bから様々に開発・発展が議論された。しかし、これらの視角を統合することは、極めて難しい。というのも、歴史学・文化人類学と経済学・農学などとの間に、大きな学的伝統のギャップがあるからである。そこで、これらのギャップを少しでも狭めることが模索された。例えば、第4回目の研究会では、開発現象への様々な視角が検討され、極めて羅列的であるが、世界資本主義システム、文化、第三世界の住民／国民の主体（意識）形成、資本主義ハビタス形成過程、実践とその帰結（文化、社会、経済、生態）といったレベルの検討、および、それらの相互関係を追求する必要が指摘された（足立）。

また、このような第三世界（広い意味での植民地状況下）における開発・発展を論じる学的言説（視角Aであれ、視角Bであれ）の問題点も指摘された（富山）。つまり、第三世界に住む研究対象と一定距離を置いた我々が提示する開発や発展の記述のなかで、押し殺され、否認されていくものについての問題提起である。

#### 4. 研究の成果とフロンティア

本研究の成果は、開発・発展をめぐる様々な論点を明らかにし、検討してきたことにある。それらについては、前節で言及したので、ここでは繰り返さない。ここでは、それらをふまえた上での、研究の最前線について述べてみたい。ただし、今回、この報告書をまとめる時点で、海外出張者が3人（野間、宇佐見、富山）いるため、福井と足立の考えのみを示すことにする。

福井は、主として視角Bから、アジアの農村開発における経済的側面とその制度的な条件について詳細な検討をしてきた。その結果、新たな課題として浮上してきたのは、経済発展に対する政府の役割、あるいは、視点を変えると、どのようなタイプの政府が経済発展に貢献するのか、という問題であるとする。そこで、今後の課題は、フィリピンやタイの比較を通して、経済発展と政府の役割についての研究であるとしている。

これに対して足立は、主として視角Aから、開発・発展をめぐる言説や、その中に現れる他者認識の形態を中心に検討を加えてきた。しかし、その過程で気づいてきたのは、単純な開発言説分析では、「第三世界」住民／国民としての主体（意識）がどのように形成されるを十分理解することはできない、という点である。つまり、先進国や途上国政府、開発機関などによって作られた開発や発展の語りや、どのようにして第三世界の住民・国民に内面化されるのか、または拒否されるのかを理解するためには、文芸批評家的な言説分析では「現実」の主体化過程は見えてこないのである。そこで、この理解が単なる言説批判にとどまらず、経験的な民族誌的記述をとおして行われるには、どうすべきか。これが、今後の重要な方法論的課題である

とする。

また、このような主体形成過程と密接に関わりながら、それと一定独立したレベルの分析の重要さも明らかになってきた。それは、ハビタスのレベルの分析である。つまり、開発過程では資本主義的なハビタス（予測・計算など）の強要が、様々に行われ、このハビタスは文化や主体（意識）とも密接に関わりつつ、それらから一定独立した様々な実践の源として機能する。そこで、このハビタスに着目する必要があるのである。もちろん、このレベルの分析については様々な方法論的な問題を抱えているが、少なくとも、この視点からは、政府プロジェクトと多くのNGOプロジェクトが開発言説や意識のレベルで相反しているにも関わらず、資本主義的なハビタスの強要という点では同じであり、開発過程における共犯関係にあることを見出しうるであろう。

さらに、もう一つ検討を要する問題がある。それは富山が指摘した開発を語る学的言説の問題である。この研究班で用いた、一見、開発実践から距離を置いたように見える立場からも、「第三世界」の開発現象を記述する際に、何らかの政治性があらわれる。そのため、その記述において何が無視され、排除されているのかを反省的に考察する必要がある。どのような語りも、様々な政治性が含まれるわけで、常にこの点を念頭に置いて、開発現象の理解と記述を行わねばならないということである。

## 5. 今後の課題

前年度から2年に亘った科研による活動は終了した。しかし、残念ながら前年度からの課題であった視角Aと視角Bの統合には、あまり進捗がなかった。前年度の活動記録では、「市場というものを普遍概念として用いるのではなく、商人と市場の地域的特性に着目し、様々な経済発展の地域性を明らかにしようとする（原）視点」から、視角Aと視角Bの統合を試み、地域的な「発展」の固有性を見いだすという課題を設定したが、このような方向での努力はあまり行うことができなかった。ただ、これまで記してきたように、それ以外の様々な研究の論点、フロンティア、課題などを明確にすることができ、今後の各自の研究の方向づけに、貴重な検討の機会を得た。そこで、当面の課題は、これらの経験をふまえながら、我々の到達点を文章化し、平成7年度中に刊行をめざすことである。

## 6. 研究業績（平成6年度発表分）

### 足立 明

「北海道らしい余暇」の語り方」『豊かな自分時間の創造をめざして』（「北海道らしい余暇」研究会報告）北海道生活福祉部，pp. 55-57，1994.

「男と女—人間社会の文化と性—」（須田一弘と共著）北海道大学放送教育委員会編『性と生—生きものに見る男と女—』北海道大学，pp. 1-10，1994.

「開発現象と人類学」米山俊直編著『現代人類学を学ぶ人のために』世界思想社，pp. 119-136，1995.

### 福井清一

"The Multiplier Effects of Rural Development Policies: A SAM Approach to a Philippine Rice Village", 『農業経済研究』66-3: 144-155, 1994.

"Efficient Share Tenancy Contracts under Risk: The Case of Two Rice-Growing Villages in Thailand", *Journal of Development Economics*, forthcoming (共著).

「ドイモイ下ベトナムにおける稲作技術効率の農家間・地域間格差について」『九大農学部学芸雑誌』49-1, 2:15-21, 1994.

「緑の革命・農地改革・所得配分—フィリピンの事例より—」『九大農学部学芸雑誌』49-1, 2:41-52, 1994.

"The Efficiency of the Permanent Labor Contract—A Case Study in Philippine Rice Bowl—", *Developing Economies*, 33-3, 1995.

『国際化時代の九州農業』（共著）九州大学出版，1994.

『アジア諸国の農村人口と農業開発に関する調査報告書—インド国—』（共著）アジア人口・開発協会，1995.

### 富山一郎

「国民の誕生と「日本人種」」『思想』845:37-56, 1994.

「戦場の記憶—証言の領域」『現代思想』23-1:203-213, 1995.

なお、分担者の野間晴雄と宇佐見晃一の業績に関しては、ともに海外出張で不在のため、この報告書に記すことができなかった。